

## ハンセン病を知って学んだこと

栃木県 宇都宮市立一条中学校 2年

東 大我（ひがし たいが）

「僕なんかその時に死んどけばよかった。」僕が母のお腹の中で何度も命が危険な状態になったことを聞いた時、母にこう言い放った。僕には吃音の障害があり、吃りを治すため今まで努力してきた。舌の病気がわかった時は舌を切って伸ばす手術もした。目の病気がわかり、メガネでの治療も始まった。なんで僕だけ…という思いが強くなり八つ当たりした。この夏、僕は見失っていた大切なことに気づき、自分の“今”を見つめ直すことができた。

一年前、偶然つけたテレビでハンセン病を知った。それは多磨全生園の敷地内にあるハンセン病資料館を紹介する番組でその事実に言葉を失った。二年生に進級したある日、また同じ番組を見た僕は、二度の偶然に驚いて、ハンセン病が気になり始めた。そんな矢先、連休に資料館に行ってみようよと、母が誘ってくれた。自分の目で確かめるいい機会だと思った僕は資料館を訪れた。ハンセン病は恐ろしい伝染病、うつると治らないと偏った考えで患者さんを一生閉じ込めた強制隔離の実態に手が震えた。狭い部屋に八人の住居、重症者の看護、土木作業等の労働、結婚しても断種・中絶を強要され、逃亡したり逆らえば監禁室に閉じ込めた。この日本でこんな信じられないようなことが行われていたのかと改めてショックを受けた。その後療養所内を散策した。納骨堂に着いた時、案内人の方から耳を疑うような話を聞いた。生まれてきた赤ん坊の口をガーゼでふさいで抹消し、ホルマリン漬けにされた三十六人の命が眠っているという。どんな小さな命でも生きたいと思って生まれてきたはずなのに生きられなかったことを思うと心臓をえぐられるような思いになり、僕なんか生まれてこなければよかったと思ったことを悔んだ。赤ん坊が眠る「尊厳回復の碑」に手を合わせ、帰宅した。

数日後、僕は再び資料館に足を運ぶ機会に恵まれた。語り部の平沢保治さんの講演会に参加することができたのだ。八十九歳の平沢さんをテレビで拝見していた僕は親しみを感じて胸が高鳴った。講演が始まると穏やかな表情は消え、強制隔離や全生園での生活等、その時の心境や思いをありのままに話して下さった。らい予防法の知識も深まった。僕と同じ十四歳で発病してから今まで受けてきた差別や屈辱は僕の想像を絶することばかりだったが、「怨念を怨念で返してはいけない」という平沢さんの生き方に強く心を打たれた。

僕は吃音がうつると言われ、手で耳をふさがれた時、何を根拠に言っているのかと悲しくて悔しくて、心がぺちゃんこになった。ハンセン病も、ハンセン病だ

と疑われただけで人として扱われない社会の暴力が行われてきたのは、病気の知識が少なかったため、必要以上に恐れられたからだ。正しいことを知らないということが心に「偏見」という壁を作り人を傷つける。その壁は僕の心の中にもある。これからは、思い込みや先入観で人を決めつけたりせず、正しいことを知る努力をしていきたいと思った。

平沢さんは僕達に三つの約束事を伝えてマイクを下ろした。①夢や希望をもってほしい。②ありがとう…と言える人間になってほしい。③この地上に一度だけ両親から頂いたこの命、どんなことがあっても大事にしてほしい…。まるで今の僕を見透かされているようで恥ずかしくなった。僕はハンセン病をテレビで「偶然」知ったと思っていたが、きっと「必然」だったのだと思う。感謝の気持ちもなく親に反発する今の僕だからこそ、聞くべきお話であったのだと、そんな気がしてならない。

講演後、平沢さんがよく来たね、何年生？と、声をかけて下さった。僕は嬉しくて少しお話しする時間をいただいた。平沢さんは、

「障害に負けないで堂々として生きていきなさい。辛い時悲しい時はいつでもこのじいさんの所に来なさいね。僕は自分の孫のように思って君を応援しているよ。」

と、僕の手を力強く握り締めてくれた。心のトゲが抜けていくのを僕は確かに感じた。平沢さんは辛い過去をお持ちのはずなのにどうしてあんなに優しくなれるのだろうか。それは平沢さんが相手の気持ちを酌み取って声をかけ、優しく接する思いやりの心を持っておられるからだと思う。思いやりのある人というのは「想像力」を持てる人ではないだろうか。例えば、困ったり悲しい思いをしている人がいたら、自分がその立場になってみて、僕だったらどんな言葉をかけてほしいだろう、どんなふうに接してほしいだろうと、相手の気持ちを想像する力を身につけている人だと思う。中学生の僕でも「想像力」を働かせることはできる。それはとてもすばらしい能力だと思う。一人ひとりがその努力をしていけば、いじめや差別は少しずつ減っていくのではないだろうか。人と人がお互いを認め合って生きていくことがどんなに大切か教えて下さった平沢さんの思いを大切に、十四歳の僕が“今”，できることをやっていきたい。